

体験の社会学

—近代スポーツの病理を超えて—

小丸 超

論文の要旨

1. 問題

本稿の目的は、社会学の中に「体験」の次元を導入する意義を示すこと、つまり「体験の社会学」の意義を示すことである。「体験」とは、偶然的に到来するものであり、そのときの感動はその人にしか分からないという意味で個人の特異性の根拠でもある。偶然性を必然性に還元したり、個人の特異性を社会の一般性に還元したりするのではなく、「体験」の次元をそのまま擁護すること、これが本論文を貫く根本的な問題意識である。

社会学はそもそも「体験」を捉えにくい仕様になっている。たとえば、周知のように、デュルケームは、社会学の対象と方法について「社会的事実を物のように考察する」と規定している。社会的事実とは、個人に外在し、個人を拘束するものであり、また個人の表現するものではなく、ある社会で共有されている行為様式のことである。しかし、「体験」は個人を拘束するのではなく、個人の新しい可能性を拓く創造であり、また社会で共有されているものではなく、体験者にしか——あるいは体験者でさえ——理解できないものである。他方、「体験」は「物のように考察する」こともできない。というのは、「体験」とは何より生きられるものであり、一回的なものだからである。つまり、「体験」は、自然科学のように、客観的に観察したり、一般的な因果法則を適用したりすることはできないのだ。

しかし、「体験の社会学」という発想そのものは、かねてより示唆されてきたものである。特にスポーツや身体を対象とする社会学では、対象の性質上、「体験」の次元を抜きに語ることは難しく、その重要性がたびたび指摘されてきた。たとえば、近年、「身体社会学」の領域では、身体を集合表象として捉えるだけでなく、(文化テキストに還元できない)「パフォーマンスの直接性」を捉えてはどうか、と提起されている。しかし、方向性を示唆することと1つの領域を確立することは別次元の話である。「体験の社会学」を確立するためには、やはりその意義を明確に指摘する必要がある、と考えられる。

本稿では、具体的領域として、スポーツを取り上げる。スポーツは身体活動であり、身体活動は「体験」の次元が現れやすい領域と考えられるからである。ところで、スポーツ界では、スポーツの生み出す様々な病理現象の存在が指摘されている。つまり、なぜ病理現象が生ずるのか、そしてそれはどのようにして乗り越えることができるのか、こうした問題に答えることが喫緊の課題となっているのだ。本稿ではこの2つの問題に答える。そして、その中で、「体験の社会学」の意義を明らかにしてゆくことになる。要するに、本稿の目的は、スポーツにおける病理現象の分析とそれを乗り越える方法の探求を通して、「体験の社会学」の意義を明らかにすることである。

2. 近代社会とスポーツ

スポーツは「近代社会の文化装置」である。文化装置とは、社会の反映物であり、主体に社会の本質（社会がどのような価値に従って動いているか）を実感させる装置のことである。つまり、われわれはスポーツに触れることで、「する」のであれ「見る」のであれ、（われわれの生きる）近代社会の本質をより深く感じ取るのである。

近代社会とスポーツを導く価値は、パーソンズの用語で言えば、普遍主義と業績本位である。普遍主義とは、特定の間人関係や集団ではなく（＝個別主義）、一般的な基準を重視する立場であり、業績本位とは、人柄や生まれではなく（＝属性本位）、能力や成果を重視する立場である。スポーツの世界では、こうした普遍主義と業績主義がシビアに展開されている。普遍主義で言えば、公平性の原則と数値主義を挙げることができる。主要なスポーツのルールは万国共通であり、競技の条件の面でも一方に不利が無いよう配慮されている。そして、選手のプレーは様々な角度から測定され、記録として保存されるのだ。他方、業績本位で言えば、実力主義、競争主義、勝利至上主義、優勝劣敗主義といったおなじみの諸価値が挙げられる。つまり、スポーツ選手は、公平性が担保された平等な条件の下で、自分の力によって競争に勝つことを求められるのだ。

人は、近代社会に生きるかぎり、普遍主義と業績主義に拘束される。しかし、スポーツ選手は、こうした価値を受動的に受け入れるのではなく、むしろ能動的に追求しているように見える。実際、ピラミッドの頂点に近づけば近づくほど富や名声は大きくなる。しかし、彼らの特徴づけるのはこうした具体的な対象への執着ではなく、無限の上昇運動——ゲートマンの用語では「進歩」の観念——への忠誠と言える。実際、近代的価値に実体的な到達点は存在しない。ある業績は到達した瞬間に通過点となるのだ。ところで、社会学の知識によ

れば、アイデンティティは社会によって与えられる。とするならば、アスリートは、この「進歩」の観念に忠実であればあるほど、自分という存在をより実感できるということになる。

3. スポーツ・病理現象・身体

スポーツは近代社会の文化装置であり、アスリートは近代社会を導く価値の体現者である。しかし、近代的価値に忠実であればあるほど、アスリートは、身体を壊し、不断の欲求不満——デュルケームの言うアノミー状態——に悩まされることになる。

近年のスポーツ批評では、スポーツの問題を解決するためには近代的身体観まで遡ることが必要である、とされている。というのも、スポーツはこの身体観の上に立っているからだ。近代的身体観によれば、身体はモノ（物質）であり、意識的に（理性で）操作できる対象である。スポーツで言えば、スポーツはスポーツする身体を必要とするし、いざ試合となれば、競技力を最大限に発揮するため、身体はまさに「管理」され、「作られる」。つまり、身体は人為的操作の対象とされているのだ。

こうした近代的身体観は身体にかかわる3つの要素を捨象する。1つ目は「身体の文化性」である。たとえば、ブラジルのサッカー選手の動きはラテン系特有のリズム感を帯びている。しかし、近代的身体観は、身体を民族などの諸集団を超越したもの（ジョン・ロックの言う「タブラ・ラサ」）として想定し、そこに設計図を書き込めば「理想の身体」が出来上がる、と考える。要するに、「身体の文化性」は（人間の）「身体の同一性」という観念のもとに捨象されるのである。

他方、この観念は同じ論理で「身体の特異性」を捨象する（2つ目）。つまり、諸民族の文化的差異と同じように、一人ひとりの身体的差異を捨象するのである。たとえば、野茂英雄のような独特のフォーム（型）は、一般的に理想とされるものとは全く違う。しかし、そのフォーム（型）はおそらく「彼の身体にとって」一番理にかなったフォーム（型）なのだ。つまり、フォーム（型）は本来「身体の特異性」によって創造されるべきものなのである。しかし、「身体の同一性」は、定義上、「身体の特異性」を認めず、場合によっては身体を「型」にはめようとする。

3つ目は「身体の偶然性」の捨象である。先に述べたように、スポーツでは、身体を徹底的に管理し、試合でベストの状態になるよう準備する。準備が完璧であれば（＝原因）、試合で良いプレーができる（＝結果）。このような想定は、身体を「必然性」（因果法則）の網で捉えようとしている、ということである。しかし、準備が完璧でも、試合で急に身体が動

かなくなるといったことはしばしば起きるし、そもそも身体を完璧に管理することは不可能である。

このように、近代的身体観はかなり限定的な身体観である。それゆえ、スポーツもやはりかなり限定的な身体活動とならざるを得ない。そこで、スポーツを捉え直すために、近代的身体観を一旦カッコに入れ、上に挙げた3つの要素を擁護してはどうか、という意見が出てくるわけである。

4. 方法

本稿では、こうした要素を擁護するため、「体験」の概念を導入し、社会学と接続するために社会化と超社会化という視点を採用する。ところで、「体験」を捉える立場は2つある。1つは現象学であり、もう1つは生の哲学である。前者は「志向性」に焦点化するのに対し、後者は「運動性」に焦点化する。本稿では、「体験」の中に「運動性」のモメントを含めたいので、生の哲学に依拠することになる。

ベルクソン哲学に依拠する作田啓一は、「体験」を「意識に先立つ経験」と規定している。とすれば、逆に、「経験」とは意識によって分節されたあとの経験と言える。「体験」の特徴の1つは「直接性」である。自転車に乗っているとき、われわれはペダルをこいで前方に進んでいる。この運動において、先行する動きと次の動きは1つの途切れることのない流れとして直接的に経験されている(=「流れの直接性」)。逆に、もし先行する動きと次の動きが分節されてしまえば、非常にぎこちない運動となってしまうだろう。他方、自転車に乗っているとき、自分の身体と自転車は、絶妙なバランスによっていわば一体となっている(=「相互浸透の直接性」)。逆に、もし自分の身体と自転車を区別し、両者を操作しようとするれば、やはりぎこちない運動となってしまうだろう。

しかし、自転車に乗ることが「体験」であると言われると、人はやや不審に思うだろう。しかし、そう思うのは、自転車に乗ることができたときの感動を忘れているからである。そのとき、われわれはいわば生命が高揚するのを感じ、乗ることができているのはほかならぬこの私だという「喜び」に満たされたはずである。

こうした「体験」の出現と「体験」の特異性という点については、デュルタイの「体験」概念によって根拠づけられる。デュルタイは、生を単に「力」(Kraft)としてだけではなく、「意味」(Bedeutung)としても捉える。つまり、生は、単に無限に流動するだけでなく(=「力」)、(相対的に分離可能な)内的一体性を創造する(=意味)、というのである。そして、

こうした、生の、生自身による内的一体性の形成——ディルタイの用語では「生の表出」——を「体験」(Erleben, Erlebnis)と呼ぶのである。この「体験」の概念によって、2つのことが指摘できる。1つは、「体験」は、主体を前提にしないという点である。それは、定義上、「生の、生自身による」ものであり、主体は、定義上、「体験」がいつ到来するかを予想することができない。それゆえ、「体験」は、主体にとっては「ふっと到来するもの」と感じられる(=「偶然性」のモメント)。他方、もう1つは、「体験」は、主体にとって特異なものとして感じられるという点である。「内的一体性の形成」とは、ある新しい諸力の連関が出現するという意味で特異である。また、こうした連関の形成によって、現下の「体験」と他の「体験」とは区別されるようになる。それゆえ、「体験」は、特異なものとして、主体の記憶に残るのである(=「特異性」のモメント)。

次に、社会化と超社会化という視点が導入される。社会化(socialization)とは非社会的な存在を、当該の社会の構成員にふさわしい存在に変えることによって、社会の存続・維持をはかる機能を指している。すなわち、社会化という機能によって、社会は新たな成員を確保することができるし、個人は成員としての資格を得ることができる、というわけだ。

しかし、社会化の概念は2つの次元をうまく説明することができない。1つ目は個性の次元である。社会学では、自己は多くの他者と差異化されることで個性的になる、と考える。しかし、個性は「個人の特異性」の表現であるとも言えるだろう。2つ目は創造の次元である。創造とは、新しいものが生まれることである。しかし、社会化によって創造は生じない。たとえば、反復練習(=「経験」)は必要条件ではあるが、それによって(必然的に)「できる」ようになるわけではなく、(偶然的に)「できる」ようになるのである(=「体験」)。

こうした社会化の概念における欠陥は、この概念が社会を前提とする概念であるという点に由来する。そこで、亀山佳明は超社会化(trans-socialization)という概念を提示したのである。超社会化とは、社会化の作用を超えてゆく作用であり、つまり「体験」に導かれることである。しかし、「体験」はそもそも何によってもたられるのか。その力として、ここではベルクソンの言う「生命の躍動力」(élan vital)を想定する。ベルクソンによれば、社会なるものは「生命の躍動力」(=創造的エネルギー)が物質の障害に出会って巡回している状態である。そして、この巡回状態(=社会)は2つ——「閉じた社会」と「開いた社会」——に分けられる。「閉じた社会」とは、自らの外側にいつも外敵を想定し、その外敵から自らを防衛しようとする社会である。他方、「開いた社会」とは、自らの外側に外敵を想定せず、生命の創造的エネルギーが、一人の特異な人間を通して、成員の間に貫流し

ている社会である。

スポーツで言えば、「閉じた社会」とは、敵・味方に分かれ、勝敗をめぐる競争している状態のことである。このとき、主体はスポーツを導く「価値」に従っている。つまり、彼は社会化の作用のもとにいるのだ。他方、スポーツにおける「開いた社会」とは、たとえば、ある創造的プレーの出現によって、選手が、あるいはファンが、敵・味方関係なく、勝敗など忘れて目を奪われてしまっている状態のことである。このとき、「体験」が到来した選手や周囲の人間は社会化の作用から一時的に離脱させられる。つまり、彼らは超社会化の作用のもとにいるのだ。そこで、次のようにまとめることができる——社会化は「価値」（社会）にどれだけ忠実であるかを原動力としている。他方、超社会化は「体験」（生命）にともなう感動を原動力としている、と。もちろん、社会化と超社会化は極限概念——ウェーバーの言う理念型——であり、両者は実際の経験において混じり合っている。それゆえ、われわれは、「社会化>超社会化」のときの経験を「経験」、また「社会化<超社会化」のときの経験を「体験」と呼ぶこともできる。

5. 各章の概要

以上の枠組に従って、各章が展開される。まずスポーツにおける病理現象の考察を通して「体験」という視点の有効性が示され（第2章、第3章）、次にそうした病理現象を乗り越えるコーチングの考察を通して「体験の社会学」が実際に展開される（第4章、第5章）。

第2章では、スポーツにおける病理現象の1つとして、アスリートバーンアウトが取り上げられる。ここでは、先行研究として、心理学と社会学におけるバーンアウト論が詳細に検討され、両者がともに還元主義に陥っていることが示される。つまり、還元主義では、心理学的要因、社会的要因といった諸要因が考慮されるだけで、バーンアウトの本質を説明できないのである。そこで、「体験」の視点の導入によって、先行研究を統合する形で「バーンアウトとはエネルギーが空回りしている状態である」と（再）解釈され、同時にバーンアウトを惹起する主因として「体験」の更新の欠如という知見が得られることになる。

第3章では、スポーツ選手における「キャリアトランジション問題」が取り上げられる。ここでは、先行研究として心理学の知見が検討され、やはりその還元主義が批判される。つまり、還元主義でいけば、「生命感の喪失」という「体験」の次元の問題が、（社会化の過程に影響を与える）諸要因の1つに還元されてしまうのである。そこで、超社会化の概念が導入され、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応（再・社会化の失敗）では

なく、いわゆる「ケリ」（脱・超社会化の「体験」）の問題であると（再）解釈されることになる。つまり、アスリートは、「ケリ体験」の欠如（あるいは不十分さ）によって、引退できないのである。

第2章と第3章で示されるのは、「体験」の視点を導入することで、より現象の本質を把握できるということである。またそこでは、スポーツにおける病理現象は——超社会化を導く「体験」であれ、脱・超社会化を導く「体験」であれ——「体験」の欠如によって発生しやすくなるという知見が示される。しかも、競技スポーツは、「体験」の到来を待つてはくれないという意味で、構造的に病理現象を生みやすくなっているのだ。そこで、次には「体験」の次元を重視するコーチングが考察されることになる。

第4章では、身体感覚（「身体の特異性」）を重視するコーチングについて論じられる。ここでは、まずガルウェイ理論が検討され、社会化のコーチング（＝強制）と超社会化のコーチング（＝育成）が区別される。そして、感覚を重視するコーチングとして、結城理論が詳細に検討され、その方法の究極である「潜り込み」が重点的に論じられてゆく。「潜り込み」とは、コーチが選手の身体感覚を内側から把握する方法である。しかし、結城の方法は記述的であり、理論的ではない。そこで、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」は理論として一般化される。その結果、「主体—客体」という枠の限界、「潜り込み」の正確性（＝「身体の特異性」の把握）、コーチに固有の主体性といった新しい知見が得られることになる。

第5章では、「飛躍体験」（「身体の偶然性」）を導くコーチングについて論じられる。ここでは、具体的事例として、「コツ」をつかむという体験（＝「コツ体験」）の誘発について考察される。まず、「コツ」と「カン」の語義の検討によって、「カン」によって「コツ体験」が誘発されるという点が確認される。次に、先行研究として黒田亮の立体心理学が取り上げられる。しかし、彼の議論は独創的ではあるが記述的であり、理論的ではない。そこで、ベルクソンの「動的図式」（動くものの潜在的イメージ）の概念が導入され、「カン」（生命の直観）を誘発するものとして「動的図式」が位置づけられることになる。そして、こうした「動的図式」の活性化を目論む指導法として、弓道の阿波研造の指導法が検討される。それは、「わざ言葉」を巧みに利用する指導法であり、弟子の「飛躍体験」をいつまでも待ちつづける指導法とされる。

6. 「体験の社会学」の意義

こうした議論を踏まえて、「体験の社会学」の意義について整理される。1つ目～3つ目までは理論社会学における意義であり、4つ目と5つ目は実践的な意味での意義である。

1つ目は「社会学主義の回避」である。社会学は、そのディシプリンにおいて社会を前提するため、創造性や「個人の特異性」を捨象する。「個人が社会を作り、社会が個人を作る」と言われるが、この言明が意味を持つためには、創造性や「個人の特異性」の根拠——つまり社会を超える「何か」——を明示しなければならない。われわれは、この「何か」として「生命の躍動力」を想定している。人間は確かに社会に拘束されている。しかし、人間は社会に拘束されるとともに「生命の躍動力」に貫かれてもいる。この点が実感される経験こそ「体験」なのであり、それゆえわれわれは「体験」を重視するのだ。たとえば、もし「体験」を考慮しなければ「キャリアトランジション問題」の本質は理解できないであろう。アスリートがスポーツに情熱を注ぎ込むのは、究極においては、名声や富を得るためでもなければ、周囲の期待に応えるためでもない。そうではなく、スポーツをすることが「喜び」だからであり、それゆえにこそ引退できないのである。こうした「体験」の視点を失うとき、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応へと還元されてしまうことになる。

2つ目は「経験主義の補完」である。社会学は、通常、経験主義的な学問として存立している。つまり、実証科学に基づき、経験的事実を客観的に検証するという手続きを重視する。この立場は、当然、あつてしかるべきである。しかし、こうした経験主義＝実証主義は、現象の本質に外側から迫っていく立場であり、それゆえ現象の本質をそのまま捉えることはできない。たとえば、バーンアウトを捉えようとするとき、実証科学は、心理学であれ、社会学であれ、還元主義的に捉える。それに対して、われわれは、「体験」の視点を導入することで、「エネルギーの空転」というバーンアウトの本質を捉えることができたのだ。つまり、「体験の社会学」は、種々のデータや知見を参考にしつつ、現象の本質をそのまま捉えようとするのである。他方、より積極的な面で言えば、「体験の社会学」の方法は実証科学よりも正確性において優れている、と言える。たとえば、スポーツ科学は選手の身体運動を外側から観察し、「物理的事実」として数値化しようとする。しかし、結城の「潜り込み」という方法では、コーチは選手の身体感覚を内側から捉えるのだ。こうした内側からの認識が外側からの認識よりも正確であるのは当然のことであろう。

3つ目は「新しい理論設定の提示」である。社会学理論は、通常、「主体—客体」という枠を採用している。この枠は、主体と客体を独立した実体として想定し、その上で両者がかか

わりあうと想定している。それゆえ、主体と客体の直接的な関係が捉えにくくなるのだ。しかし、「体験の社会学」では、「体験」（分節以前の経験）と「経験」（分節以後の経験）を区別するとともに、それぞれの経験が生ずる世界——たとえば「生成の世界」と「定着の世界」——を区別している。こうした理論設定——包括的用語として「存在—存在者」の枠と呼んでおく——によって、「体験」の生ずる世界における「主体—客体」関係への道が拓かれるのである。あるいはまた、こうした理論設定は2つの世界の移行の問題を惹起するだろう。この点について、われわれは、不十分な考察ではあれ、ベルクソンの直観論や「動的図式」論を通して、多少の道筋はつけることができた、と考える。

4つ目は「スポーツ界への貢献」である。特に、第4章と第5章では、「体験」を導くコーチングについて論じられている。そこでは、感覚であれ、運動であれ、あるいは言葉でさえ、その使い方によっては——つまり「動的図式」を活性化させるものであれば——「体験」を誘発できる、ということが示されている。筆者の知るかぎり、コーチングの現場では、もはや社会化のコーチング（＝「強制」）の限界が露呈しており、いかにして「体験」を誘発するか、この点が喫緊の課題となっている。実際、理論枠組や用語の差はあれ（たとえば「選手をゾーンに導くにはどうすれば良いか」）、いくつかの探求が散見される。

5つ目は「研究領域の拡大」である。「主体—客体」という枠ではなく「存在—存在者」という枠を採用することで、深さの程度や質という問題が射程に入ってくる。たとえば、超社会化を導く「体験」、あるいは脱・超社会化を導く「体験」は、もちろん測定することはできないが、スポーツの種類や競技水準の差異など、種々の事例を分析してみると、いくつかのパターンが見えてくるかもしれない。また、コーチング方法という点ではより研究対象は広がってゆくだろう。つまり、「体験」を導くコーチングのヴァリエーションを増やしてゆく、という作業である。そして、ここでも、やはり、スポーツの種類や競技水準の差異など、種々の事例を分析してやる必要があるであろう。あるいはまた、スポーツ以外に対象を広げることでもできよう。

7. 今後の課題

そして最後に、今後の課題について触れられる。

1つ目は、先に述べたように、「体験の社会学」の枠組に沿って研究領域を拡大してゆくことである。スポーツの種類、競技水準の差異、コーチング方法の開発、コーチングにおける質の問題、深さの程度という視点、あるいはスポーツ領域以外への適用など、仕事は山積

みであると言えよう。

2 つ目は、「体験の社会学」の手続きについて、つまり方法論の問題である。先に述べたように、実証科学の手続きとは、現象の本質に対して外側から迫ってゆくという方法である。具体的に言えば、様々な要因を列挙して、そこに存在する共通点を探ってゆくのである。では、「体験の社会学」ではどのような手続きに沿って研究を進めるべきなのだろうか。おそらく、様々な要因を考慮するところまでは実証科学と同じであろう。しかし、そのあと、道は分かれる。つまり、諸要因間の共通点を探すのではなく、一種の「追体験」(ディルタイ)によって現象の本質に迫ってゆくのである。たとえばバーンアウト者に自分自身を重ねて、あるいはそれに似た自分の経験を延長して、彼らの心身の状態を(イメージの力を借りて)「追体験」するのである。そして、そうした「追体験」の中で、ある種のひらめきを「待つ」のだ。繰り返せば、「体験の社会学」の方法とは、一種の「追体験」を通して、何かをひらめくのを「待つ」という方法なのだ。それゆえ、実証科学の手続きと比べて、かなり生産性の低い方法である、と言わねばならない。われわれとしては、もっと明確な仕方で、「体験の社会学」の方法を定式化する必要があるだろう。

3 つ目は、(第3章で指摘されている)「引導を渡すコーチング」である。本稿では、脱・超社会化を導く「体験」という重要な概念を提起しながらも、それを十分に展開できずに終わっている。というのも、この種の「体験」は「体験」におけるネガティブな側面であり、「体験」を「喜び」として規定する本稿の趣旨と齟齬をきたす恐れがあったからである。われわれは、超社会化のコーチングのみを扱うにとどめた。しかし、脱・超社会化のコーチングは、スポーツ界の現状を思えば、今後ますます重要になってくるはずである。もっとも、こうしたコーチングを明確に提示するためには、「体験」の概念をもっと深めてゆく必要があるだろう。たとえば、比喩的に言えば、超社会化を導く「体験」は「生」であり、脱・超社会化を導く「体験」は「死」である。では「生」と「死」はどのような関係にあるのだろうか。生の哲学の立場からすれば、「生は死を含んでいる」と考えるべきであろう。このことを「体験」の水準で言い換えれば、「体験」とは破壊と創造にほかならず、両者は表裏一体なのだ、となるであろう。われわれは、こうした両者の一致について、いずれ理論化しなければならないだろう。

本稿には、あまり詰められていない理論や論理もあり、その点、不十分であるように見えるかもしれない。しかし、「体験の社会学」という新しい領域を切り開いてゆく1つの試みとして、本稿は相応の理論社会的な価値を有している、と筆者は考えている。